

インドネシア訪問記 ―学部間協定結び、交換留学制度を確立―

医学研究科長 荒川哲男

3泊5日の弾丸ツアーを大畑教授(国際交流委員会委員長)と石村病院教授(国際交流委員)とともに敢行した。その間、飛行機で6回飛び、デンバサール経由(バリ島の楽園を素通り;もったいない)でスラバヤに1泊、ジョグジャカルタに移動し1泊、最後はジャカルタに飛んで1泊、その夕方に日本へ。翌朝関空に着き、即大学で仕事という大畑先生の計画には、さすがに人間技とは思えない片鱗を感じた。それに耐えぬいた2人も偉いと、自己自賛も許してもらえるだろう。

アイルランガ大学医学部の詳細な報告は2人に譲るとして、ジャカルタ第二の300万人大都市として、立派な敷地と伝統ある医学部キャンパス附属病院が凜としてある。大畑教授の弟子たちが脳外にスタッフとして活躍していて、そのせいか熱烈歓迎を受けた。医療レベルは本学部にはまだまだ劣ってはいるものの、国際性は負けたと感じた。まず、言語。英語がスタッフ全員が自然に(なまりは強いが・・・)話すこと。次に造り。迎賓のためのハード(すなわち豪華な応接室)とソフト(すなわち記念品やもてなし)。学ぶべきものが多かった。



[歓迎風景 (迎賓室で)]



〔おもてなしもたっぷり〕



〔調印式〕

消化器内科を見学させてもらったが、これは悲惨。内科学のなかに 7 つのユニットがあり、その中の 1 つであるが、スタッフは 5 名、レジデントが数名で、内視鏡がなんと 3 セットしかないという。年間件数は 3000 と本学部の 1/3 以下でも 3 本は少なすぎる。しかも、洗滌は手洗い。(写真) 患者も症状が出ないと来院しないので、見つかったら進行癌で、内視鏡治療などほど遠い状況でし

がなく、消化器内科医の腕の見せ所がないから、悲惨な状況に強いられているようだ。彼らにとってこの協定は大きなメリットとなるに違いない。内視鏡診断と治療の講演を行ったあと、さっそく消化器内科の教授から質問があった。スタッフを受け入れてくれますか？ 宿泊などの費用は？



[ティッシュは3つのみ：腹部超音波、上部、下部内視鏡を並べてやってるみたい。日本では考えられない]



[内視鏡は手洗浄で洗浄機もなし。日本では考えられない]



[でも、教授室は結構立派]



[病院は綺麗]

こちらの受け入れと派遣のアドバンテージは、彼らの国際力への情熱とシステム。これは学ぶべきことが多い。それに親日だ。ほとんどの人たちが（レストランや空港施設など、また道行く人々を含めて）笑顔で親切。まったく不愉快な思いは、滞在中ずっと一度もしなかった。

次にジョグジャカルタのガジャマダ大学医学部。こちらは規模とクオリティ

一ともアイルランガ大より一歩上。しかし、医療レベルはやはり日本からはかなり劣ってはいる。ただ、アイルランガ大で感じた以上に国際力は豊かだ。まず、秘書がすぐれもの。それも何人もいる。英語も接遇も完璧だ。キャンパスを案内してくれたのは、循環器内科のレジデント。彼女もすばらしい。



[ガジヤマダ大医学部の迎賓室はもっと立派]



ガジヤマダ大学医学部には、インターナショナル・コースと一般コース（母国語）の2コースに分かれていて、高い志あるものはインターナショナル・コ

ースを選ぶ。彼女もその一人。知識、気配りから、その能力の高さを感じる。悲しいかな、この大学ですら、消化器内科の内視鏡は6セット。税金がどこかで吸い取られているのか、現場までは届かない。そのような現状を見つつも、異文化に触れること、そこに生きる志ある人と接することの重要性を肌で感じ、多くの市大学生やスタッフと共有したいという思いが強くなった。



[内視鏡はオペ室を流用している]



[ここでもスコープはわずか6本]



[洗浄機はあった！ でも1台]

ジャカルタに飛んで ERIA（東アジア・アセアン経済研究センター）を訪問した。経産省大臣時代にこれを創られた二階国会議員が「ジャカルタに行くなら訪問したら？」という言葉をいただいて、3人訪れたら、忙しい中西村事務総長が丁寧に面会してくださった。これも詳細は大畑、石村両先生に譲るが、有意義な話ができた。

「大阪市立大学は国立大学のコピーではない」という、当時大阪市長の關一氏の設立の理念が今も熱く感じられる。大阪にある大学の中で、大阪の活性化を使命と最も重く受け止めるべき我が市立大学医学部が、行うべき原点として、「ものづくり」を抜きにしては語れない。大阪の中小企業とスクラムを組んで、ものづくり医療コンソーシアムのメッカを本医学部に創設し、ナノテク医療機器を、アジアを中心とする世界に発信していくプロジェクトを、「まいど1号」のものづくり大使 青木豊彦氏と協調して進めていくことで意気投合している。実は、二階先生を紹介してくれたのも、他にもない、先生と懇意にしている青木氏である。

夢とロマンを、この市大医学部を拠点に実現していく決意が、ますます堅固なものとなったジャカルタ訪問であった。